



医療支援が行われた現場（長崎大提供）

## 医療支援活動を報告

長崎大教授「続けることが重要」

震地パルネ

ネパール中部で発生した大地震で、民間活動団体（NGO）とともに現地地で医療支援活動に参加した医師で

長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授（国際保健学）

が12日、同大で帰国報告を行った。山本教授は「大河に注ぐ1滴のような活動だったかもしれないが、それが集まらないと、大きな支援にならない。途切れのな

い支援を続けることが重要だ」と語った。

山本教授は4月30日から5月4日まで、国際NGO「AMDA」とともに現地

で医療支援活動を展開。4月30日に首都カトマンズに入り、5月1〜4日には山岳地帯のカリチョウ地区にAMDAが設けた仮設診療所で活動。重傷者を見極め、治療の優先順

位を決める「トリアージ」を行ったり、治療を終えた人に、きれいで安全な飲料水の作り方などを教えたりした。

山本教授によると、診療所には、1日約70人の被災者が数時間かけて歩いてきたり、担架で運ばれてきたりした。骨折や打撲、切り傷のけがが多く、現地の病院が被災しているために出産や腹痛などで訪れる人もいたという。

山本教授は「現地の人の表情は、比較的明るかった。ただ、家族が亡くなり、家と家畜を失って、自分には何もなくなったとつぶやくお年寄りもいた」と現状を紹介した。